

椿新田における豪農経営の成立

池 田 宏 樹

Materialization of the rich farmer management at the Tsubaki newly claimed rice field

Hiroki IKEDA

Abstract

The lake of the Tsubaki was in the eastern part in the country of Shimohusa. The size was one following the lake of the Hamana. The lake was reclaimed at the end of the 17th century and became a big newly reclaimed rice field. There is a lot of study about this newly reclaimed rice field.

However, there is little study of the big landowner who was sprung into the newly reclaimed rice field. It became recent and a lot of historical records were newly discovered. This study is using the historical records which were discovered. Then, the big landowner is the one to have made formed circumstances and the actual state of the management clear.

キーワード

17世紀末・椿新田・新田開発・大地主・経営

1. はじめに
2. 元禄8年検地と夏目村
3. 向後家の出自と土地集積
4. 夏目村の概要と階層構成
5. 豪農経営の成立
6. おわりに

1. はじめに

農林省農務局が大正13年6月に調査した「50町歩以上ノ大地主」によれば、千葉県には50町歩以上者が57人おり、そのうち第8位の岩瀬為吉121町歩と第39位の向後積善58町歩は椿新田内に存在した大地主であった。岩瀬為吉は明治中期に銚子の米穀商であった者が椿新田の琴田村沖に100町歩余を一括購入して進出してきたのである。

(1) それに対して向後積善の場合は椿新田が開発され、元

禄8年に幕府代官が行った高入れ検地以来の近世農民の系譜を持つ者であった。

椿新田は幕府が開発した近世有数の大新田であり、これまでに多くの研究が行われてきている。(2) しかし椿新田内に出現した地主の研究については存外少ない。菊地利夫氏は元禄3年に開発者の3元締が追放され「古村の3人の豪農に売却された時点に、椿新田の中にあった町人請負新田は消滅して、3人の豪農が巨大な寄生地主と

して出現することになったということができよう」とされておられるが、(3) それには中村勝氏が「広大な土地買い集め人たちの土豪的地主への道は阻止される。(略) 正徳期以降に1村切り名主となる者の中から村方地主的発展が見られる」と主張するような批判がある。(4) けれどもこれまでその実証的な追究はされて来なかったのが現状である。ところが幸いにも平成14年に旭市在住の越川栄一郎氏のご尽力により、香取郡東庄町夏目の向後家の史料保存が行われた。そして翌年夏には川名登千葉経済大学教授の指導による集団調査で『向後七郎兵衛文書目録』が作成され、椿新田の巨大地主の史料が公開されることになったのである。(5)

本稿ではこの巨大地主が近世期においてどのように成長し、豪農経営を成立させてきたものであったのかを追究し、これまでの椿新田における実証的な地主研究の弱点を克服することに努めたいと考えるものである。

注)

- (1) 拙稿「維新期の東総における魚肥流通構造」(海上町史研究19号)、1982年。拙稿「水田単作地帯に於ける100町歩地主の成立」(『東国の社会と文化』所収)、1984年。拙稿「大正政治史における一考察」(海上町史研究27号)、1987年。拙稿「寄生地主の経営と展開」(千葉経済短期大学商経論集第22号)、1989年。
- (2) 最初の研究は渡部英三郎「九十九里平野の開拓」(水利と土木13の3、4) 1939年であり、戦後の研究では菊地 利夫『新田開発・改訂増補』古今書院、1957年。『大利根用水事業史』上・下巻、1958年。小笠原長和外「東総農村と大原幽学」(千葉大学文理学部文化科学紀要5)、1961年。小笠原長和外「旭市を中心とする東総村落史の諸問題」(千葉大学文理学部文化科学紀要10)、1968年。藤田覚「元禄・享保期東総一在村商人の動向」(地方史研究121号)、1973年。『旭市史』第2巻、1973年。中村勝「椿新田における新田地主の形成過程」(『房総地方史の研究』所収) 1973年。『干潟町史』1975年。石川辰男「干潟八万石をどうみるか」(香取民衆史1)、1976年。拙稿「近世後期の 椿新田に於ける農民層の存在形態」(海上町史研究2号)、1976年。北爪正子「蛇園村々差出帳に見られる出作をめぐって」(海上町史研究3号)、1976年。大野孝子「下総国岩井村下椿新田における入作農民」(海上町史研究5号)、1977年。服部重蔵「三川堀」(海上町史研究5、7、8号)、1977年。鈴木広一「椿新田における年貢収取と土地所有者の変化」(海上町史研究7号)、1977年。川名登「真説“椿新田開発記”(1)」(海上町史研究12号)、1979年。『旭市史』第1巻、1980年。『飯岡町史』、1981年。『海上町史・特殊史料編』、1982年。拙稿「椿新田

開発研究の到達点と課題」(『海上町史・特殊史料編』所収)、1982年。『東庄町史』1982年。菊地利夫『続新田開発・事例編』1986年。『海上町史・総集編』1990年。

- (3) 前掲菊地論文『続新田開発・事例編』454頁
- (4) 前掲中村論文142頁
- (5) 『向後七郎兵衛文書目録』は千葉経済大学学芸員課程紀要第9号に収録、2003年。また原史料は「伊勢家文書」と称し、現在はNPO法人「干潟八萬石」が管理している。

2. 元禄8年検地と夏目村

元禄8年の高入れ検地帳は海上町史の調査で椿新田18か村のうち伝存が明らかでない琴田・鎌数・幾世・長尾の4か村を除いて14か村分が発見され、前掲『海上町史・特殊史料編』に収録されてある。しかも最近になって幾世村検地帳2冊のうちの1冊が新たに発見されたのである。これら15か村の検地帳での名請人を検討すると、新田外の他村の名請人が99か村から923人おり、総面積1975町7反3畝13歩のうち、彼らの名請面積は1178町1反6畝18歩で59.4%を占めていた。その名請人の所持面積を区分すれば、10町歩以上1.7%、3～10町5.7%、1～3町11.4%、5反～1町53%、1反以下6.9%の状況であって、60%以上は周辺村落からの零細な出作者であったことが窺われる。5町歩以上の名請者が40名いるが、その名請地を悪地下々田以上と草間以下とに区分して示したものが表1である。名請地の最多の者は太田村六郎右衛門で103町5反19歩である。しかし草間以下の田地が94.3%を占めていた。(1) それに対して江戸の名請人たちは圧倒的に耕作可能な悪地下々田以上を所持していたのである。江戸の名請人の例を清瀧村の場合で見ると、上田面積3町2反1畝26歩では2人の江戸名請者で1町1反1畝12歩と34.6%を占めており、他村入作者53人の名請地は2町5畝3歩であった。生産力の高い所を多く占めていたのであって、明らかに投資対象として所持していたものと考えられる。(2) また第19位の摂津西宮村八郎兵衛や第23位の鹿島郡知手村^{として}五郎兵衛は漁業関係者と思われる。

椿新田で幕府御用地が存在したのは夏目村・八重穂村・万歳村の3か村であったが、夏目村には耕地158町歩余のうち149町歩余と、最も多くの御用地があった。

名請人の内訳は御用地預かりが他村入作者50町3反3畝8歩、夏目村農民73人で36町9反3畝14歩、また村内農民共同で62町3反3畝2歩であったが、村内農民自身

表1 椿新田名請上位者一覧

順位	村名	名請人	所持面積	内 訳	
				悪地以上	草間以下
1	太田村	六郎右衛門	10350.19	590.04	9760.15
2	太田村	六郎兵衛	6424.14	69.03	6355.11
3	下永井村	藤右衛門	4037.06	3939.13	98.23
4	江戸	太右衛門	3745.17	3629.20	115.27
5	江戸	元章	1886.00	1875.03	11.27
6	今宮村	加右衛門	1864.02	353.10	1510.22
7	江戸	佐市郎	1711.21	1492.04	219.17
8	江戸	三郎兵衛	1531.14	1531.14	0.00
9	江戸	茂右衛門	1508.26	1508.26	0.00
10	網戸村	八郎右衛門	1443.19	762.03	681.16
11	泉河村	清五郎	1222.20	276.28	945.22
12	塙村	新右衛門	1137.13	966.03	171.10
13	江戸	仁助	1073.17	1035.23	37.24
14	八日市場村	福善寺	1038.26	3.06	1035.20
15	江戸	久五郎	1037.16	865.28	171.18
16	三川村	与惣左衛門	971.26	574.23	397.03
17	小南村	福聚寺	938.13	938.13	0.00
18	鍋木村	忠兵衛	935.23	935.23	0.00
19	西宮村	八郎兵衛	929.19	657.19	270.00
20	井戸野村	与五右衛門	830.29	380.25	450.04
21	江戸	理兵衛	805.01	789.08	5.23
22	新里村	伝兵衛	796.24	629.08	167.16
23	知手村	五郎兵衛	789.16	789.16	0.00
24	阿玉川村	理右衛門	769.25	769.25	0.00
25	小南村	大通	755.29	0.00	755.29
26	三川村	兵庫	755.02	311.04	443.28
27	萩園村	七郎右衛門	726.06	655.25	72.11
28	諸徳寺村	十右衛門	710.26	387.03	323.23
29	八日市場村	半十郎	694.25	297.06	397.19
30	上永井村	主水	686.09	654.00	32.09
31	椎名内村	新右衛門	672.21	605.18	66.23
32	志高村	次左衛門	619.09	130.12	488.27
34	太田村下	小兵衛	572.19	534.28	37.21
35	太田村	作兵衛	558.00	558.00	0.00
36	吉崎村	三左衛門	554.06	456.23	97.13
37	網戸村	武右衛門	552.20	89.05	463.15
38	吉崎村	久兵衛	552.01	477.21	74.10
39	八日市場村	孫右衛門	528.10	365.12	162.28
40	椎名内村	丑之助	505.20	474.04	31.16

注)「元禄8年検地帳」より作成

の名請地は14人で8町6反3畝5歩にすぎなかった。預かり地と名請地を合計して村内農民の所持状況を見れば、2町歩以上者2人、1～2町歩6人、5反～1町歩17人、1～5反42人、1反歩以下6人と零細であったことが分かる。(3)

注)

- (1) 太田村の六郎右衛門は元禄4年に御用地347町歩を4,770両で入札を落札させた人物であり、「干潟開発雑録」には「三右衛門は六郎右衛門ト又親戚ノ間柄ナリ、三右衛門ハ又辻内善右衛門ノ甥ト云フ」とあるから、三元締の関係者であったものであろう。
- (2) 清滝村の中田では35.6%、それに対し下田24.9%、下々田24.1%と生産力の低い所ほど占める割合が低い。
- (3) 正徳期に村の代表となり、初代の名主となる市郎右衛門は6反23歩で、それは御用地であった。

3. 向後家の出自と土地集積

向後家の祖、七郎兵衛は何時に登場するのであろうか。『香取郡誌』によれば、「其先主水正なるものあり、海上郡永井に住し、笠間胤知の子胤輔を養ひ嗣と為す、九世正胤3子あり、仲を七郎兵衛と曰ふ、元禄年中干潟新田開鑿の挙あり、幕府沿村巨族に命じ役を助けしむ、七郎與かる役竣り、夏目に移り住し」とある。(1) 文政4年の「椿新田見立興起」では代官池田新兵衛手代役人衆の中に「縄引役七郎兵衛」とある。これが『香取郡誌』の伝える向後七郎兵衛を指すものであろう。(2) けれども元禄8年の夏目村検地帳には登場していない。最近発見された同年の幾世村検地帳では七郎兵衛とあり、1町5反4畝14歩を名請けしている。これは2冊のうちの1冊分であるから、これ以上の名請けをしていたものと考えられる。(3) 幾世村七郎兵衛は元禄14年この地方を襲った飢饉に際しては、同年12月に夏目村・清瀧村・大間手村・高生村・鎌数村・米込村・万力村の7か村の代表とともに夫食拝借願いを幕府に出願しており(4) また正徳3年7月には新田村に1村毎の名主設置を夏目村・清瀧村・大間手村・万力村の4か村の代表と一緒に出願していた者である。(5) 七郎兵衛が幾世村から隣村の夏目村に何時の時点で移り住んだのかは不明である。伊勢家文書に伝存する証文の最も古いものは正徳2年の流質地証文である。それは夏目村の市郎右衛門が5反2畝歩余の土地を60両で七郎兵衛へ流質地にしているものである。(6) 享保12年の下永井村八郎兵衛が夏目村内で5反歩の土地を差し出し

た流質地証文では宛先が夏目村七郎兵衛となっており、享保期頃に夏目村に移住したと思われる。(7) 享保15年には下永井村惣右衛門がやはり夏目村内の4反歩を流質地に差し出している。(8) 享保17年の「覚」によれば下永井村の重郎右衛門は夏目村の1町7反8畝11歩の土地を1反に付1斗8升取りに決め、七郎兵衛から年貢諸役を引いた残り米1石8斗5合5勺を受け取っている。(9)

享保18年上永井村三郎兵衛は七郎兵衛に土地を売却しており、(10) 同年12月には下永井村藤右衛門が夏目村で6反歩の土地を七郎兵衛へ流質地にしていた。(11) この下永井村の藤右衛門は前掲表1に第3位で登場していた宮野藤右衛門である。藤右衛門は元禄6年鍋木村下で10町歩を250両で太田村加瀬重兵衛から購入していた人物であった。(12)

上永井村三郎兵衛や下永井村の藤右衛門は元禄8年の段階で清瀧村に名請人として登場しているが、夏目村では名請けしておらず、何時の時点で土地を取得したのかは不明であるが、それらの土地を七郎兵衛が買い入れていたのである。

宝暦8年の記録では下永井村の藤右衛門とは巳・申・酉・亥の4年にわたって七郎兵衛は高分けを行っており、6町6畝3歩(67石2斗1升2合)を七郎兵衛の名義としていた。さらに午年の高分けでは1町3反1畝10歩(16石1斗5升7合2勺)を取得している。この4つの干支年は享保10年・同13年・同14年・同16年、また午年は元文3年と思われる。そして元文5年8畝歩、延享3年5反2畝18歩、延享4年2反6畝24歩(8石6斗1升2合)を藤右衛門から買い入れているのである。すなわちこの高分けと買入によって七郎兵衛は8町2反4畝25歩、高にして91石9斗8升1合2勺を所持したことになったのであった。(13)

注)

- (1)『香取郡誌』1921年、841頁
- (2) 前掲『海上町史・特殊史料編』1197頁
- (3) 伊勢家文書「下総国海上郡松ヶ谷村下椿新田御検地野帳書」(元禄8年)
- (4) 前掲『海上町史・特殊史料編』1157頁
- (5) 前掲『海上町史・特殊史料編』646頁
- (6) 前掲伊勢家文書「流質地証文之事」(正徳2年4月)
- (7) 前掲伊勢家文書「相渡申流質地証文之事」(享保12年閏正月3日)

- (8) 前掲伊勢家文書「流質地証文之事」(享保15年12月27日)
- (9) 前掲伊勢家文書「覚」(享保15年5月)
- (10) 前掲伊勢家文書「請取覚」(享保18年正月晦日)
- (11) 前掲伊勢家文書「相渡申流質地証文之事」(享保18年12月)
- (12) 前掲『海上町史・特殊史料編』72頁
- (13) 前掲伊勢家文書「藤右衛門分十四町水戸地廿丁浜宿高訳帳」(宝暦8年2月)

4. 夏目村の概要と階層構成

夏目村の村高は1438石9合であり、元禄8年から天領であったが、延享2年に佐倉藩領となる。この間に名主は初代市郎右衛門から元文2年に市左衛門に代わっている。宝暦13年に天領と旗本榊原氏の2給支配地となるが、

- (1) それに先立ち宝暦4年に名主は市左衛門から市兵衛に代わっていた。明和4年に天領分は安中藩領となり、安中藩は海上郡太田村に陣屋を構えて地方支配を行い、安中藩と榊原氏の2給支配は維新まで変わらなかった。宝暦13年の夏目村明細帳によれば、家数は118軒、このうち水呑小作百姓が18軒であった。村内には馬53疋がいたが、米の津出河岸である桜井河岸まで1里の距離にあり、運搬に活用していたものと考えられる。「薪等之義本田方ニ而買調」、「家作木惣而材木ハ本田方ニ而買調申候」とあり、村内に肥料用の採草場がないため、「田畑こやしの義ハ馬屋こひ、土こひ共ニ、1反ニ付20駄ほど、干か1俵或は2俵ツツ」と金肥導入に依存しなければならない場所であった。また「種貸御拝借仕候」、「夫食御拝借仕候」とあり、新田場であることから、総じて「当村ハ里方ニ而困窮之所ニ御座候」の村柄でもあった。(2) 椿新田内では南向きの高地勝ちな場所に位置していたので「元来御高免ニ御座候」であったと云う。享保18、19両年にわたり、「椿新田一同水腐」の事態となった際には、幕府代官原新六郎の普請方が廻村してきたが、高地勝ちのことから逆に増税を命じられ、また代官鈴木小右衛門によっても寛保3年から増税されてきた。宝暦12年からは老中堀田正亮の佐倉藩領となったが、さすがに歎願がすぐ受け入れられて凶作での減免と夫食拝借が行われ、その返納分は免除されていた。しかし年貢滞納が続き、佐倉藩領から再び天領に戻ると、明和2、3年の凶作には検見の見分があったが、3分1以上の不作ではないとして、代官遠藤兵右衛門から定免制の導入が実施された。そのため歎願すると「御年延米石被仰付」となったけれども、明和4年安

中藩領への領地替えにあたって、「右御年延米不残御取立ニ預り至極難儀仕（略）遠藤兵右衛門様御役所者上納相済候へ共、今以当御役所様江者御返上納不仕至極難儀」と苦しい状態に喘いでいた。

そこで明和期の打ち続く不安定な気候の中での高免に苦しむ夏目村の農民の声を聞いてみよう。明和7年は旱魃があり、非常な旱損場所には190俵の延米措置があったけれど「御定免辻大俵数皆済成兼候ニ付、当春（明和9）成田村御役所様ニ而居村持添高持百姓御内借被為仰付、其外私共他借仕、都合160両余御上納仕候」と借入金で上納していた。いよいよ金主へ元利返済する段階に至って「田方ハ不残明田同様ニ罷成、畑方江者毒虫出生仕喰損いたし、一切返済成兼」と行き詰まってしまった。「夫喰ニ差詰り候百姓ハ夫喰乞ニ地奉公罷出申候得共、隣郷近在ニ者一切相手無御座候」と奉公先もなく、「遠国江罷越申候得とも、路用諸掛り相懸り、漸々60以上10歳以下之夫喰ニ罷成候」となっても、「御年貢米永納方一切罷成不申」と云う状態であった。

それでも明和8年までは村内で地主たちが人足などを雇っていたりしていたが、「去8月よりひまヲ出し（略）余慶之田地者作り兼（略）地主方より御上納辻年柄ニより半納ハ弁納仕候」の有様であった。「例え者銚子妙福寺江鐫木村久甫と申仁、寄進地御座候所、近年ハ寄進人ハ不及申、妙福寺之方も村方江田地ヲ揚ケ申候間、村役人弁納ニ罷成候」と当時東総有数の豪農であった鐫木村忠兵衛家の銚子妙福寺への寄進地の噂話を取り上げており、「其外作人無御座御田地数多御座候（略）御高免故、高ヲ持候而も不益と罷成（略）兩年大旱魃打続申候故、別而高地之場所、御田地ニ相成り不申候様、勿論水持不申故、苗代ニ罷成り申間敷」と云うことから、小作人は地主に土地を返還してしまい、しかたなく村役人が小作人に相談するけれども、「御高免之村ニ御座候故、一切作人無御座御田地故、金子書入質地ニ相手無之、地持難儀仕候」と金子を貸してくれる者もない始末であった。このような困窮の原因は定免の村になっていることから来るものである。「御定免年数明候ハ、御検見入、御見取ニ被為遊、下免ニ御引下ケ被成下」と彼らは強く歎願していたのである。(3)

ところで夏目村は正徳3年では家数95軒、そのうち水呑22軒であったが、村落の階層構成はどのようになっていたのだろうか。それを表したものが表2である。

表2 夏目村階層表

	安永7年	寛政5年	慶應2年
0～1石	19	24	71
1～5	25	28	40
5～10	24	24	15
10～20	15	16	21
20～50	14	11	6
50～80	2	2	2
100石以上	1	1	1
計	100	106	150

注)「伊勢家文書」より作成

安永7年も寛政5年も同様の階層分解傾向を示しており、5石以下が40%以上ある。これらの大半が20石以上層の地持ち百姓への小作農民であったと思われる。それでもこの段階では5石以上から20石未満の中農層が38%程あった。しかし慶應2年に至ると1石以下が71名と激増し、しかもこのうち29名は無石百姓であり、後述するように七郎兵衛家の小作農民であった。また中農層は23%と激減しており、両極に分解する傾向をはっきりと示していたのである。勿論100石以上者は七郎兵衛である。それでは七郎兵衛はどれほどの所持高であったのであろうか。元文3年の場合は所持面積は不明であるが、取米高は196石7斗7升1合8勺で、このうち年貢分が116石2斗1升8合3勺、地主取り分が62石6斗2升1合9勺であった。この年の小作人への減免分が16石4斗9升5合6勺で、実際の手取り分は46石1斗2升6合3勺にすぎなかった。(4) 寛延3年は所持面積は25町9反6畝4歩であった。しかしこの年の小作付帳には取米が記載されてあるものは、なんと7石4斗5升9合7勺にすぎない。(5) 宝暦11年では所持面積25町6反3畝29歩、取米18石1斗5升5合9勺であった。(6) 村柄でも紹介したように凶作もあり、新田の生産力が安定せず、所持高が大きかったけれども小作経営には非常に不安定な状況を示していたのである。

注)

- (1) 榊原藤兵衛^{まさのり}政武は宝暦13年5月に200石を香取郡内に移される（『寛政重修諸家譜』第16巻371頁）
- (2) 「下総国香取郡夏目村明細帳」（宝暦13年5月）（野村兼太郎『村明細帳の研究』所収）
- (3) 前掲伊勢家文書「乍恐書付を以奉願上候」（明和9年正月）
- (4) 前掲伊勢家文書「午年御年貢米惣取米萬差引皆済目録帳」

(元文3年10月)

(5) 前掲伊勢家文書「午年田畑小作付反別帳」(寛延3年1月)

(5) 前掲伊勢家文書「巳年田畑小作付反別帳」(宝暦11年1月)

5. 豪農経営の成立

明和9年の時点では安中藩は運賃に20俵余を村方に与え、年貢米664俵を江戸に廻米させ、また旗本榊原氏も運賃米4俵余で年貢米130俵を蔵納させていた。(1)

ところがまず榊原氏が安永2年から年貢先納を開始した。元金34両に利息分8両1分で42両を「巳年差引勘定目録」として年貢米納入と相殺することにしたのである。(2) 安永4年の先納42両3分余は小南村権右衛門29両、夏目村助右衛門3両1分、七郎兵衛10両1分の負担であった。(3)

連年にわたる先納金の上納から榊原氏は返済に際して「未より酉12月御用金残金、月並御払残り、酉年より午年迄10ヶ年賦ニ被仰付、1ヶ年ニ御米55俵10ヶ年賦之内被下置候」と年賦返済とし、1か年に年貢米を55俵渡すことにしたのである。この段階ですでに元利145両3分余の借金を村方に負っていたのである。安中藩太田役所でも安永4年閏12月に才覚金60両の上納を命じており、(4) 「板倉様酉年より卯年迄7ヶ年賦御用金被仰付、其節御用金一所割合申候」と両支配者からの御用金賦課が重なってしまった。(5) この御用金賦課が始まった時期に名主の交代があり、七郎兵衛が市兵衛に代わって名主役に登場する。初代七郎兵衛は享保17年に夏目村組頭になっていたが、元文3年時点で隠居しており、2代目の七郎兵衛が名主に就任したと思われる。(6) 安永7年12月に夏目村では七郎兵衛以下9名が「御返金分」55両3分を米で167俵余を受け取っているが、七郎兵衛は金17両3分、米にして53俵余の受領であった。(7) 天明1年の榊原氏の年貢皆済状況を見ると、納米228俵余のうち、55俵が御用金の年賦引きであり、さらに75俵余の御用金引きが加わり、残り米も地払いにしており、実際に米納したのは45俵にすぎなかった。(8) 天明5年12月には暮れの諸入用金として榊原氏へ13両余の御用金が上納されているが、その他に歳暮品として鰯節10、塩鮭2本、塩鰯2俵、田作1俵が送られている。(9) このような村内取り纏めをする七郎兵衛の行動に領主側は「其方儀年来出精相勤殊此度気持注成御取計有之段御満足ニ被思召仍而其身1代苗字帯刀御免被仰出者也」と苗字帯刀の特権を与えたのである。

そして以後公的には向後七郎兵衛を名乗るようになる(10) しかし次々に求められる御用金賦課にさすがの向後七郎兵衛も「私方ニ而手段を以、来ル6月、7月御雑用迄ハ調達仕、此度御上納之積り持参仕候得共、盆之御入用より8月よりの御入用之儀何分御用捨」と用捨願いを出願している。(11)

榊原氏は寛政2年の段階で夏目村に162両余の借財があったが、それを10年賦にし、それまでの1年に年貢米55俵を引き渡す方式を改め、「収納米の内時相場を以御引当」とすることにした。(12) このようなことに心労があったものであろう、向後七郎兵衛は「私儀段々御上様奉蒙御憐愍之是迄名主役相勤候得共、元来せんき持病有之候所、年増痛み段難儀仕候、其上近頃者たんしゃく度々差おこり至而難洪」と名主役の退役を申し出ている。(13) 勿論認められることなく続投となったが、領主側も御用金返済には「収納米之内2割之利金差加江、元利共時相場を以」と農民側の期待に込めている。(14)

向後七郎兵衛は何時投資したのか不明であるが、銚子荒野村穀町に1反4畝10歩の宅地を入手していた。明和4年の地代金は15人から地代金16両2分2朱を受け取っている。(15) 新田経営の不安定さ、領主側の高免と御用金要請に対し、おそらく一種の危険分散を考えての措置ではなかったであろうか。天明8年からは大坂屋勘四郎に代わって大坂屋市郎兵衛が地代金の徴収に当たっている。そして寛政期も借地人15人は12両2分2朱を納めている。(16)

さて、向後七郎兵衛家の出金状況を示したものが表3である。寛政期と文化期では領主への上納金は大きくは変わらないが、文化期では一般貸金と流地代金が飛躍的に増加している。このことは向後七郎兵衛家が経営的に安定性を示してくる状況を反映しているものである。寛政11年の場合は入金状況も把握出来るが、267両1分2朱を受け取っている。その主な内訳は年貢米代金142両1分、一般の米代金75両3分であり、また銚子荒野村の地代金が8両1分あった。(17)

文政期は文政5年に安中藩へ調達金387両、同8年には隣村小南村の領主である旗本佐野氏へ350両を用立て、また同9年と10年に安中藩へ50両と70両を上納していたが、この時期から貸借上のトラブルが続発するようになる。まず文政12年に地代金徴収に当たっていた大坂屋市郎兵

表3 金銭支出状況（単位：両）

年代	上納金	一般貸金	流地代金	質地代金	その他	合計
寛政6年	50.00	43.20	90.00	13.00		196.20
寛政7年		7.22		13.00	6.00	26.22
寛政8年		33.31		146.00	1.20	181.11
寛政9年	150.20	35.02	13.00	10.00	4.00	212.22
寛政10年	33.00	57.20	17.30	12.20	33.00	153.30
寛政11年	16.00	89.20	85.00	186.22	53.02	429.32
文化6年	126.00	60.22	128.32	14.20	24.00	354.00
文化7年		93.13	28.10	13.20	2.00	137.03
文化8年		65.30	166.01		2.00	233.31
文化9年		77.10	60.30	18.00	3.20	159.20
文化10年	100.00	121.32	11.10	8.00	14.20	255.02
文化11年		102.20	347.12	196.10	23.30	669.32

注) 寛政11年・文化11年金銭出入帳より作成

衛との間に発生する。向後七郎兵衛は文化11年に荒野村の美濃屋嘉助に25両を用立て、文化13年には同村芳屋文蔵と辺田村浄国寺へ25両づつ用立てていた。しかしこれらの証文は大坂屋市郎兵衛の名義にしてあった。ところが文政10年市郎兵衛が病死したことから催促に及ぶと、市郎兵衛後家とその親類は「証文私方ニ所持無之候而者取用ニ不相成趣申張」と主張して応じなかった。そればかりでなく、文化8年から文政11年の18年間も地代金の勘定が滞納となっていたのである。向後七郎兵衛は高崎藩の飯沼役所へ訴え出た。(18)

次が貸金のトラブルである。それは文化2年に万歳村の三右衛門へ78両を貸したことである。仲介人が同村の組頭元右衛門であったことから「元右衛門江申聞候所、同人被申候ハ、万歳村両名主名代ニ組頭罷出取扱候ニ間違無之、三右衛門義当時1000両之株者有之候得者、気遣等ハ無之杯と過言等被申候間、任其義ニ書付茂取置不申候而右金78両取渡候」と信用してしまったと云う。文化2年から天保2年まで27年間も返済がなく、太田役所へ訴え出したものであった。(19) さらなるトラブルは天明4年に万歳村の御用地等9反2畝15歩を大久保村義兵衛の名義で買い受けておき、小作人茂兵衛に耕作させた。「祖父義兵衛と申ものハ慥成者ニ御座候間、取立米之世話為致置申候」と義兵衛に小作米の徴収にあたらせていたのであったが、代替わりになって両者間でのトラブルとなったものである。「御年貢米諸役等ハ毎年上納仕候証文之義茂、名主伝右衛門其外組頭衆迄茂入御覧、去卯年4月中御願申上候得共、今以前御直し無之」と太田役所へ訴えた

ものであった。(20) これら3つのトラブルはいずれも結末は不明である。長期にわたって証文もとらず、また名義の書き換えも行わない等、今日の経済的常識では想像も出来ないことである。たしかに様々な事情があったものと考えられるが、過酷な御用金要請に応じなければならず、そのためにも経営基盤の強化が求められており、これらの事件は向後七郎兵衛が豪農経営を成立させていく過程に起こった事件であった。

注)

- (1) 前掲伊勢家文書「当辰御年貢米目録」(明和9年12月)
- (2) 前掲伊勢家文書「去巳年当年榊原先納金勘定御屋敷御書付写」(安永3年12月)
- (3) 前掲伊勢家文書「当申年榊原様御用掛諸色覚帳」(安永5年正月)
- (4) 前掲伊勢家文書「覚」(安永4年閏12月)
- (5) 前掲伊勢家文書「榊原様御用金10ヶ年賦払方目録帳」(安永6年12月)
- (6) 前掲伊勢家文書「相渡し申手形之事」(元文3年12月25日)には「18年以前丑年御隠居七郎兵衛殿より被下」との文言がある。
- (7) 前掲伊勢家文書「当戌先納御年貢御返金米割附帳」(安永7年12月)
- (8) 前掲伊勢家文書「丑年貢皆済之事」(天明1年11月)
- (9) 前掲伊勢家文書「請取申金子之事」(天明5年12月25日)
- (10) 前掲伊勢家文書「状」(天明5年12月)
- (11) 前掲伊勢家文書「乍恐以書付御窺奉申上候」(寛政1年6月)
- (12) 前掲伊勢家文書「差上申御請一札之事」(寛政2年正月13日)
- (13) 前掲伊勢家文書「乍恐以書付奉願上候」(寛政2年12月)
- (14) 前掲伊勢家文書「先納金証文之事」(寛政4年正月)
- (15) 前掲伊勢家文書「地代金扣日記」(明和4年12月)
- (16) 前掲伊勢家文書「寅ノ年地代金勘定帳」(寛政7年2月)
- (17) 前掲伊勢家文書「当未年金銭出入覚帳」(寛政11年1月)
- (18) 前掲伊勢家文書「願書」(文政12年12月)
- (19) 前掲伊勢家文書「乍恐以書附奉願上候」(天保3年9月)
- (20) 前掲伊勢家文書「乍恐以書附奉願上候」(天保8年10月)

6. おわりに

弘化4年の所持面積36町9反6畝23歩、取米高249石9斗7升5合5夕、万延1年は41町8反3畝4歩、240石8斗2升3合9夕、慶應3年は38町3反歩、274石3斗7升2合9夕であって、幕末は小作収納がほぼ安定している。

(1) また慶應3年の金銭出入の状況を見ると、出金は1454両2分3朱と銭171貫902文である。その内訳は領主への上納金418両2分、一般貸金423両1分と銭20貫211文、頼母子講等の掛金が72両3分と780文、麦・大豆買入代10両3分と16文、村交際費55両1分2朱と34貫339文、これと関連する酒肴代7両3分と56貫248文、用水費20両1分2朱と320文、農業経営の肥料代27両1分2朱と5貫465文、また給金は28両2分である。さらに様々な寺社等に勧化しており、それが33両1分と1貫932文あった。借入金の返済は244両2朱と2貫197文であり、生活諸費が112両3分2朱と49貫975文である。この支出に対して入金は1035両2分2朱と165貫文であった。それは米代売却によるものが697両3朱と156貫文であり、なかでも銚子米商人五字藤左衛門・菅谷太郎右衛門・田辺屋栄吉等から272両1分2朱と156貫文、また榊原氏の売却分172両1分が中心となっていたのである。(2)

椿新田には幕末に所持高100石を越える農民は万歳村、清瀧村、鎌数村、あるいは琴田村等に存在してきている。しかし所持高の大きさだけでは歴史学的には決して豪農と云えるものではない。(3) 向後七郎兵衛は享保～元文期には数十町歩を所持し、その経営は小作人を70人以上も使っていたけれども不安定そのものであった。銚子荒野村の宅地を取得して、地代金収入を計る等ということは商業的感覚がなければ出来るものではない。彼は小作経営だけに依拠するのではなく、名主役に就任し、村内を取り纏め、領主の信頼を受けて苗字帯刀の特権を得ることで、さらに結びつきを深めて年貢米の地払いを行っていた。しかもその米の一部は地代金徴収役をしていた銚子商人大坂屋へ売却すると云う在方商人的性格を備えていたのである。慶應3年の金銭支出では地域金融の働きをしていた頼母子講や積金講に積極的であり、交際費や勧化費には豪農の特性を良く表している。また万延2年には村内の西と八幡丁の両地区での困窮者たちへ夫食米28俵を貸し出していたが、これも豪農の条件の一つであろう。このような豪農条件を備えるようになったのは文化期以降のことであると考えられる。寛延3年の所持面積が25町歩余、それが明治6年には40町3反歩以上に、(4) そして冒頭の大正13年調査では58町歩となっていたのであるが、この近代の成長については後日に追究したいと考える。また近代に登場した椿新田内の対照的な大地主である岩瀬為吉家との比較研究も今後合わせて行いたい

と思っている。

注)

- (1) 前掲伊勢家文書「田畑小作附御年貢割合帳」(弘化4年10月)、「当申田畑小作帳」(万延1年11月)、「当卯小作取立帳」(慶應3年10月)
- (2) 前掲伊勢家文書「金銭出入帳」(慶應3年1月)の集計による。
- (3) 拙稿「揖保川流域における豪農経営の成立」(千葉経済大学短期大学部研究紀要第2号)、2003年、12頁で豪農の条件を示しておいた。
- (4) 前掲伊勢家文書「当酉小作取立帳」(明治6年11月)この帳簿に限らず、これまでの小作付帳等には一切地位が記載されていない。1反に付6斗3升が取米の基本であった。また「田1ヶ所」と面積のないものもある。明治6年の場合はそれが52か所もあるので、正確な面積は把握出来ない。

付記、本稿作成にあたって史料閲覧に多大なご便宜を図って下さり、その上貴重なご教示を頂いた越川栄一郎氏に、また度々の調査に協力を頂いた本学ビジネスライフ学科2年の栗原大樹・梅澤恵理両君に記して深謝の意を表したい。